

## JICA 中国事務所ニュース 6月号

### 目次

#### 【最近のトピックス】(中国西部大地震緊急援助特集)

- ◎ 国際緊急援助隊(JDR)救助チーム ～裏方から見た現場～ .....1
- ◎ 国際緊急援助隊医療チームの支援活動に参加した忘れがたき日々 .....2
- ◎ 中国西部大地震に対する緊急援助(物資供与)の実施  
～事務所での後方支援～ .....3
- ◎ 語学力を武器に援助隊をバックアップ ～活躍した通訳たち～ .....4
- ◎ JICA ボランティアの気持ちが華西病院へ届けられました .....4

#### 【ニュース】

- 無償資金協力「第二次黄河中流域保全林造成計画」がついに竣工 .....5
- プロジェクト調整員会議開催 .....5
- 安徽省で日本祭りを開催 .....6
- 日中市民環境(3R)交流展  
～ハイムーン環境漫画が北京にやって来た!～ .....6
- 第4回温嶺之江小学校文化体育祭りが開かれました .....7

#### 【人の動き・主要行事】 .....7

#### 【寄稿コーナー】

- ◎ 地震災害後の救援活動 ～JICA 長期研修員同窓会の活動～ .....8

## 最近のトピックス (中国西部大地震緊急援助特集)

### ◎ 国際緊急援助隊(JDR)救助チーム ～裏方から見た現場～



人民解放軍の兵士と

2008年5月12日14:28に発生した汶川大地震。14日に緊急支援物資対応で成都に入り、JDR救助チームの派遣決定に伴いそ

のまま業務調整員として現場に入りました。時間が無いのに混乱する情報の中、多くの関係者との調整をつけながら、食料、水、燃料等の物資の調達、移動用車両の確保、成都空港での救助隊員と救助機材等の受け入れと殺到するマスコミの方々の問合せ対応等、携帯が鳴り止まない状態がずっと続きました。

現場に入ったのは4日間でしたが、そこで見たものは、まさに地獄絵図でした。山道を半分以上塞ぐ落石、瓦礫の山と化したアパートや学校、散乱する教科書やノート。懸命に勉強していて、一瞬のうちに命を奪われた何百人という子供たち……一体何時になったらご遺体を瓦礫

の下から救い出し、ご両親のもとに戻してあげられるのでしょうか？

瓦礫の下で生存者が待っていることを信じて、昼夜を厭わず懸命に作業を続ける救助チームの皆さんには本当に頭が下がる思いでした。とにかく、体調を崩さないように、少しでも体力が回復できると、現場でできる限りのバックアップをしたつもりでしたが、もっとうまくやれた部分もあったのではという思いと、現場での臨機応変な対応の難しさを実感させられました。同時に、日本の救助チームに対する中国の皆様温かい声には何よりも励まされ、ほとんど寝られない状態で作業する原動力になりました。

撤収が決まり、成都に戻るようになってからは、機材の返送等の帰国に必要な一連の手続きを何度も確認しながらの対応でした。途中、何度も連絡が着かなくなったトラックに振り回されながらも、日本大使館や領事館、中国事務所の支援メンバーの皆様のご支援のお陰で何とかすべて無事に終わることができましたことを心よりお礼申し上げます。

(業務班 林宏之)

### ◎ 国際緊急援助隊医療チームの支援活動に参加した忘れがたき日々



子供から「ありがとう！」

5月下旬、私たちを含む中国事務所のナショナルスタッフ数名は、国際緊急援助隊医療チームの支援活動のために四川省に派遣されました。私たちは華西病院に設けられた医療チーム本部テントを主な活動拠点としていましたが、緊張の連続の中にも、毎日のように

に発生する多くの感動的な事件に遭遇することができました。それは、私たちが JICA 中国事務所で長年働いてきた中でも、最も心に触れる日々の連続だったといえるでしょう。

華西病院は二千名以上の被災重傷患者を受け入れており、災害時緊急医療の大きな緊張の真っ只中、支援に駆けつけた日本の医療チームはそれぞれ、救急、ICU、透析、産科、整形、放射線、薬剤等の科に分かれて、中国の医療人たちと共に奮闘しました。彼／彼女らの人道主義の精神と高度なプロ意識は中国の医療関係者及び患者の尊敬と賞賛を獲得しました。



日中友好の握手(放射科黄主任と小倉副団長)

私たちは、隊員たちと一緒に直接病室に入って患者を治療する活動に参加したわけではありませんが、私たちの心を揺さぶる感動的な忘れがたい出来事は病室の外においてもたくさんありました。ここでは、その一部を紹介したいと思います。

ある日、ひとりの女の子がお母さんと一緒にテントの前に現れました。彼女はまずテントの前に掲げている緊急援助隊活動を紹介するパネルをじっくり見た後、作業中の佐藤隊員の前に恥ずかしそうにやってきて、勇気を振り絞って手を差し出し、隊員の大きな手を握って、英語と日本語で、「Thank you! ありがとう！」と大きな声で言いました。

産科にて活動した隊員は、地震により重傷を負った妊婦を担当しました。この妊婦は、隊員が活動を終えて帰国すると知った時、通訳をつうじてこの隊員に言いました。「このお腹の子が生まれたら、私はこの子に日本語

を学ばせます。10年後、この子があなたに再会した時、命の恩人に日本語で直接お礼を言えるように。そう信じています。」この隊員は、「患者さんからこんなことを言っていたら、私は涙を抑えることができません。」と言いました。



市民から感謝の花束を受ける田尻団長

6月2日。隊員たちが帰国する日。早朝に、いつも隊員の送り迎えに使っていたバスに乗り込み、双流空港に向かおうとした時、突然、いつもは寡黙な運転手が近くにいた私たちに対して、「通訳してくれますか？私も言いたいことがあるんだ。」と言いました。彼は続いてこのように言いました。「普通の市民の心の中からの感謝を受け止めてください。このような困難な時に、遠くから私の故郷を救うために来てくださってありがとうございます。私はあなたたちのために車の運転ができて光栄に思っています。」静かだった車両の中に隊員たちの熱烈な拍手がわきあがりました。

私たちが聞いた幼い女の子の声や妊婦の言葉と隊員の涙、この運転手への隊員たちの拍手の音は、すべて日中の未来の相互理解・相互信頼への福音です。この時、みんなの心に蒔かれた希望の種は、将来大きな芽を出すに違いないと信じます。

報道によれば、この度の日本の緊急援助隊の活動は日中の国民間の和解を促進し、ある意味では日中関係の歴史を書き換えることになったといわれています。現場にいたものの感覚として、このような言い方は決して誇張ではないと信じています。

緊急援助隊の皆様の「無私奉獻」に感謝し、人の恩を知り、それに報いようとする心を持

つ被災市民の皆さんに感謝したいと思います。（相互理解班 周妍、総務班 馬理）

### ◎ 中国西部大地震に対する緊急援助（物資供与）の実施 ～事務所での後方支援～

事務所での後方支援業務は、緊急援助物資や援助隊などを如何にスムーズに受け入れ、一刻も早く被災地に届け、活動を支援するか、ということになります。特に救助チームについては、15日正午頃に派遣の第一報が伝わってきたその日の夕刻7時には成田空港を飛び立つという時間が極端に制限された中での受け入れとなりました。



刻々と変化する現地の情報を共有

事務所での業務では、“情報”が非常に重要です。例えば、東京では外務省とJICAの緊急援助隊事務局が密接にやり取りを行っていますので、うっかりしていると、現地の情報が当事務所よりも先に事務局に伝わっていたりします。そこで、全力疾走している4頭立て（外務省、事務局、大使館、当事務所）の馬車から転げ落ちないように、常に最新の情報を入手し、それを関係者間で共有を図ることが大きな役割となります。そして、このような情報のやり取りの中で、全体の動きに対応し、当事務所としてやらなければならない任務をつかみ取り、中国側のC/P機関と交渉したり、現場にいるスタッフに事務所からの指示を伝えたりすることになります。

その際、現場との間で軋轢も生じます。救援活動に忙殺される中国側の関係者に対して、物資の搬送状況に関する情報や救助チームの活動場所などの情報を求めたり、時



には急かしたりしなければなりません。事務所から指示するのは簡単ですが、やはり実際に中国側と折衝する現場はたいへんだと思います。しかし、情報が命である、事務所としては現場の苦労を感じつつも、やはり動いてもらわざるを得ません。

そんな電話漬けの中、ニュースなどで報道される緊急援助隊の勇姿に支えられる毎日でした。(業務班 奥田久勝)

### ◎ 語学力を武器に、援助隊をバックアップ ～活躍した通訳たち～



活躍している通訳万紅さん

今回の緊急援助隊派遣で大きな力となってくれたのは通訳の皆さんです。今回事務所は救助チームに6名、医療チームに8名の専門の通訳を派遣しました。

救助チームが青川県、北川県と続く長距離の移動と睡眠もままならない過酷な環境の中で、日本から来た隊員たちと中国側救助隊、そして地元住民との橋渡し役を務めました。医療チームも、専門的な医療用語を駆使しながら、患者への診療をサポートしました。

その内の一人は、中国の救助隊が日本の救助チームの救助技術を学びながら次第にレベルアップさせ、最後にお互いが信頼しながら共に救助活動を行う場面に立会い、通訳として非常にやりがいを感じた、との感想を聞かせてくれました。通訳の皆さんにとっては、自分の武器である語学力を駆使して緊急援助隊をバックアップできたことに大きな意義を見出したようです。

実は、JICA 事務所や成都では、「通訳の

ボランティアをしたい」という問い合わせが何件もあり、実際に医療チームが活動した華西病院では日本語専攻の四川大学生がボランティアとして活動されました。

様々な通訳の活躍で緊急援助活動が可能になったことも記憶に留めておきたい事実です。(業務班 大久保)

### ◎ JICA ボランティアの気持ちが華西病院 へ届けられました！

「自分たちにも何かできないだろうか」。中国西部大地震の際、中国には63名のJICAボランティアがいました。日頃から中国国内で奮闘しているJICAボランティアは震災の時にこそ力になりたい気持ちを持ちながらも、配属先での業務や安全対策措置との関係から現場へ駆けつけることができない忸怩たる想いを抱いていました。



華西病院に贈られた JICA ボランティア手作りの横断幕

(左から二人目が工藤隊員、三人目が松井隊員)

このようなボランティア達の思いから、今回、北京にて定期総会が実施されるにあたり、募金活動、千羽鶴の作成、横断幕の作成をし、それらを日本国際緊急援助隊が活動した四川大学附属華西病院に渡すため、ボランティアの代表者である工藤さやか青年海外協力隊員(看護師・四川省涼山州徳昌県中医院)と松井真也同隊員(理学療法士・四川省徳陽市第五人民医院)が6月19日(木)11時に華西病院を訪問し、寄贈品を受け取っていただきました。この模様は四川電視台(テレビ)や成都商報(新聞)でも報道され、また四川大学附属華西病院のホームページでも、「千羽の日本の心のコもった折鶴が華西病

院に飛んできた」と題して、詳しく紹介していただきました。63名のJICAボランティアの気持ちや、少しでも被災された皆様に伝えることを祈っています。

(ボランティア調整員 臣川元寛)  
(<http://www.cd120.com/yejun/detailmorenew.php?stid=101&Snewstype=0&nid=3763>)

## ニュース

### ■ 無償資金協力「第二次黄河中流域保全林造成計画」がついに竣工！

6月6日に山西省南西部の吉県で、「第二次黄河中流域保全林造成計画」の竣工式典が盛大に挙行されました。当時外国人未開放地区であった吉県等で2001年の基本設計調査から約7年の長い道のりでしたが、日中双方の関係者の努力で約5,000haの植林地の活着率がなんと98%に達するという優れた結果を残せたプロジェクトになりました。

特に海外林業コンサルタント協会の山下秀勝業務主任が、現地の農民の皆さんと一緒に汗を流し、監理を徹底したことで、それまで何度植えても枯れてしまっていた荒地に再び木が育っています。山下さんは、こうした功績を認められ、山西省から友誼奨を贈られました。



竣工式典の様子

また、農民代表の鐘声さんより、「山下さん達が残してくれたものは、目に見える植林した木だけではなく、日本人の勤勉さや仕事に対する情熱という目に見えないものを多く学んだ」という素晴らしいスピーチもいただき、参加者一同とても感銘を受けました。

吉県での最後の夜は、賑やかな親睦会が開かれましたが、事務所から参加した某所員は所長の鞆持ちにも拘らず、またもや白酒大好きな猛者達の攻撃にあえなく撃沈したのであります…。(業務班 林宏之)

### ■ プロジェクト調整員会議開催



プロジェクト調整員会議の様子

今年度に入り初めてのプロジェクト調整員会議が6月6日、JICA中国事務所で開催されました。岡田次長から国際協力銀行(JBIC)との統合について説明があったほか、総務班、経理班、研修班からもそれぞれ連絡事項が伝えられました。また、事務所の談話室・顧問弁護士による著作権法に関する講義が行われ、出席者からはホームページからの画像資料の引用、専門家とカウンターパートとの共著、翻訳と著作権の関係に関する質問などが相次ぎ、この問題への関心の高さが伺われました。

中国では今夏、オリンピックが行われ、国内外から注目を集めている中、春節前の雪害に始まり、チベット問題や山東省での列車事故、中国西部大地震と大きな出来事、災害が続きました。中でも深刻な被害をもたら

した中国西部大地震の被災地と被災民に対し、日本政府が緊急援助を行ったことを中国のマスコミも大きく報道したのは印象的でした。今回の会議でも、日本の援助に対して謝意を示されたとの報告が複数の出席者からあり、日中間のわだかまりが溶けつつあるのでは、と嬉しい予兆が感じられました。

(長期専門家 江田佳代子)

## ■ 安徽省で日本祭りを開催



音楽に合わせて浴衣姿を披露

5月31日(土)に安徽省合肥市で合肥第一回専科日本文化祭りが開催されました。これは青年海外協力隊18年度2次隊の日本語教師の高島恵輔隊員の配属先、安徽中澳科技職業学院が主催となり開催された安徽省で初めての専科の学生のための日本祭りです。

当日は、日本クイズ・朗読コンテスト・書写コンテスト・寸劇コンテスト・浴衣ショー・剣道の演武・日本留学説明会・Jテスト(日本語試験の一種類)説明会などが行われ大変な盛り上がりを見せました。専科の学生は本科の学生に比べて学習意欲に繋がる原動力や日本に触れる機会が少ないという中で、今回のお祭りは生徒に新たな目標と意欲を与えるいい機会になったのではないのでしょうか。

開催に至るまでには数々の困難がありました。高島隊員のカウンターパートである劉先生の努力と、それをサポートした高島隊員の情熱が大きく実を結んだ形となりました。隊員とカウンターパートの連携の理想図を見せてもらったお祭りでもありました。

(ボランティア調整員 中坊容子)

## ■ 日中市民環境(3R)交流展

～ハイムーン環境漫画が北京にやって来た!～



高月先生にサインしてもらおう子供達

環境意識の向上と日中の環境活動の交流を図るため、「日中市民環境3R交流展」が、6月10日から15日にかけて中国科学技術館で開催されました。この交流展は、ごみ減量のための3R(リデュース、リユース、リサイクル)を中心テーマに、「ハイムーン環境漫画」や、日本市民の環境保全活動を中国の一般の方々に紹介するために実施しました。

「ハイムーン環境漫画」とは、廃棄物問題が専門の高月紘(たかつき・ひろし)京科大学名誉教授が自分の研究活動の傍ら、High Moonというペンネームの漫画家として、環境問題を訴えるために描いている一コマ漫画のことです。今回の交流展では20点の原画を展示しました。会場には、連日約50～100名が訪問しましたが、皆、環境保全へのメッセージが込められたハイムーン漫画を熱心に見入っていました。

また、14日にはワークショップ「まんがを描いてごみを減らそう!」も開催されました。まず北京市の小学生約40名が、高月教授から直々に環境漫画の描き方の指導を受け、次に自分でごみの減量に関する漫画を描き、最後にそれぞれの漫画にこめたメッセージを参加者全員の前で発表するというイベントでした。北京の子供達が人前でも物怖じせず、しっかり自分の意見を発表する姿は、会場の大人たちに感銘を与えていました。

今回特に、私たちに馴染みのある漫画というものが、国境を越えて多くの人たちに深いメッセージを伝えることができるとわかり、



漫画のもつ威力を実感しました。ハイムーン漫画を見た子供達が、これをきっかけに自分たちの生活を見直していくことを願っています。(業務班 長安美恵)

#### ■ 第4回温嶺之江小学校文化体育祭りが開かれました！



元気いっぱいの子供達

四川省涼山彝族自治州にある温嶺之江小学校は標高 3000m の高地にあります。通り慣れていても、ちょっと走ると息がきれてしまいます。私たち涼山州の協力隊員 3 名はそれぞれの活動を行いながら、週に一度この「山の小学校」へ通っています。彝族が住むこの村はジャガイモと韃靼ソバを作り、主にそれらを売ったわずかな収入で生活しています。

今回で 4 回目となる文化体育祭は、先輩隊員の方々が築き上げた上にあります。徐々に地元政府や村民たちの理解と協力を得て、今年も開催することができました。

この文化体育祭の開催の目的は①学習成果を発表する機会を与える、②一つの目的の為に協力し努力することを学ぶ、③父兄に参観してもらい教育への関心を持ってもらう、④協力隊の活動を地元政府、教育局、衛生局などに知ってもらい技術移転を行う、です。

私たちが特に力を入れたのは「はみがきの歌」のダンスです。この目的は歯磨きの重要性を訴えてきたものを更に定着化することです。子供たちが歯ブラシを持ち「歯磨きの大切さ」を歌った童謡に合わせて踊りました。この踊りを通じて隊員から子供たちへ、そして子供たちから大人たちへ歯磨きの大切さを伝えることができたと思います。

これからも地元の方々とともに涼山州に発展する人材の育成を行ってまいりたいと思います。



歯磨きの歌に合わせて踊る子供達

(四川省西昌市涼山民族中学に派遣された青年海外協力隊員 小林順子)

## 人の動き ・ 主要行事

### (1) 主な調査団(派遣中・派遣予定)(6月)

- ・広州院内感染対策プロジェクト終了時評価調査団(6/22～7/3)
- ・首都周辺風砂被害地域における森林植生生物復旧及びモデル林造成調査計画調査団(5/15～8/9)

### (2) 6月の主要行事

- ・ボランティア総会(6/14-18)
- ・日中NGOシンポジウム(障害者支援をめぐって)(6/26-27)

## 寄稿 コーナー

### 地震災害後の救援活動

#### ～JICA 長期研修員同窓会の活動～

2008年5月12日に四川大地震が発生したのをうけ、私たち JICA 長期研修員同窓会は直ちに行動を起こし、各メンバーに連絡して災害地域支援の具体的な方法について協議しました。同窓会に中国地震局に勤務しているメンバーが2名いたことから、理事会はすぐに彼らから災害地域の最新情報を聞き取り、災害地域で最も不足しているものは防疫薬品と住民に防疫知識を広めるパンフレットだと確認しました。それからすぐにパンフレット『防疫の手引き』作成を決定し、最短時間で災害地域の住民に届くことを目指しました。



何霞帶領西南財經大學法學院的學生們整理同學會的賑災宣傳讀本《防疫小知識》  
防疫知識のパンフレットを整理する何霞さんと西南財經大の學生達

パンフレット作成においては、中日友好病院専門家らのサポートを得て完成させ、5月19日(月)には8000冊のパンフレットを成都にいる同窓会メンバー、何霞さんが在籍する西南財經大學法學院に速達で郵送しました。また同窓会は何霞さんを現地の配布活動責任者に任命しました。

何霞さんがパンフレット配布のために、成都市の華西病院へ赴いたところ、取材を受けたラジオ記者から、現地では絆創膏が不足しているという話を聞きました。何霞さんは同窓会と緊急会議を開き、最終的にそれぞれのパンフレットに絆創膏を1枚つけ、同窓会

のパンフレットが災害地域住民にさらに役立つよう手配しました。7200冊のパンフレットに絆創膏をつける作業を終え、何霞さんは直ちに配布活動を行ない、北川、汶川、什邡、綿竹など災害が深刻な地域に向けて7400部を発送するなどしました。

深刻な自然災害を前に、四川の人々は勇敢に現実に立ち向かい、全国民は熱心に災害地域を支援しましたが、私たち同窓会も最短時間で各分野の力を集めて積極的に支援活動を進め、同窓会の団結力と行動力を改めて証明しました。すべての絆創膏、パンフレットと同窓会からのお見舞いが被災者にわたり、今回の支援活動は被災地の住民の健康回復に何らかの貢献ができたと感じています。被災地の再建にはまだまだ時間が必要ですが、同窓会として今後も持続的に支援活動を行い、美しい四川がかつての活力を取り戻すのに貢献することを決意しています。



何霞在日本醫療隊的帳篷前向中央國際廣播電台的記者姜平介紹我們同學會的賑災防疫讀本  
中央國際放送局のインタビューを受ける何霞さん

(長期研修員同窓会)

(編集部注)

今回の震災に当たっては、JICA 関係のもう一つの留学生同窓会である JDS (留学生支援無償事業) 留学生同窓会も熱心に募金活動を行いました。今回、日本に留学中の JDS メンバーにからの日本円で総額 25 万円を、また帰国したメンバーからは人民元で総





独立行政法人 国際協力機構  
中華人民共和国事務所

北京市朝陽区東三環北路5号 北京發展大廈400室 郵便番号:100004  
TEL: +86-10-6590-9250 FAX: +86-10-6590-9260

額1万2512元を集め、6月2日に同窓会代 ました。  
表から中国赤十字本部に対し全額を寄付し

=====

\* 皆様からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所沈 曉静 (shenxiaojing.cn@jica.go.jp) へてにお願いいたします。

=====

\* その他お知らせ

JICAのホームページ: チャイナ ライブラリー (和文・中文)

> <http://www.jica.go.jp/china/library/news/index.html>

> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/library/01.html>

チャイナ トピックス (和文・中文)

> <http://www.jica.go.jp/china/topics/index.html>

> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/topics/index.html>